

## 『羊の歌』「渋谷金王町」を読む

立命館大学大学院文学研究科 福井優

### I、「渋谷金王町」<sup>1</sup>の位置付けと概略

#### ○位置付け

「祖父の家」：母方の家族について	}	「家庭史」
「土の香り」：父方の家族について		
<u>「渋谷金王町」：出生、人生の「出発」</u>	}	幼少期（1919～26）
「病身」：「読書」との出会い		
「桜横町」：東京府豊多摩郡渋谷町立常盤松尋常小学校に入学（1926～）		

#### ○概略

- 1、「無愛想で「商売家のない」医者」父・信一
- 2、加藤家の子女教育
- 3、加藤のみた「悪夢」の意味

加藤周一（1919～2008）の父・信一（1885～1974）は、東京帝国大学の大学病院の内科教室で医局長を務めていたが、辞職して渋谷金王町で医院を開業する。加藤はその家で生育した。信一の無愛想故にその医院は流行らなかった。しかし、辰野家や「ある財閥の本家」は信一の腕を信頼していた。また、両親は共に教育に熱心で、加藤と妹は平等に扱われ、厳しく合理的にしつけられた。加藤と妹をカトリック系の幼稚園に入れるか、否かで両親の意見は対立し、結局加藤のみが入園することとなった。しかし、加藤は幼稚園で他の子供たちと馴染もうとせず、退園する。そして幼い加藤は、巨大な車輪のようなものに押しつぶされる、あるいはうず巻きの中に飲み込まれていく「悪夢」をみて、恐怖するのだった。

⇒①加藤と両親との関係性は、どのようであったか？

②加藤のみた「悪夢」は何を意味するか？

---

<sup>1</sup> 加藤周一『羊の歌——わが回想』岩波新書、1968年、26～37頁、改版では29～41頁、初出は『朝日ジャーナル』1966年11月20日号。

## Ⅱ、解釈

### 1、「無愛想で「商売家のない」医者」父・信一

「大学の同窓には、山形から出て来て、言葉に訛のある斎藤茂吉がいたし、また後年富士見に療養所をつくり、文筆の事にも携った正木不如丘がいた。当人も歌をつくってはいたけれども、歌の上では「明星」の系統の人々との交りが多く、斎藤茂吉や正木不如丘とのつき合いが、詩歌文筆にまで及ぶことはなかったらしい。」(26頁、改29頁、1段落)

父の親族、生家を描く「土の香り」に続いて、加藤周一の父で医者 of 信一の人となり描かれる。浦和県立中学校、第一高等学校を経て、東京帝国大学医科大学に入学した信一の同窓には、歌人・精神科医の斎藤茂吉(1882～1953)、小説家・医学者の正木不如丘(1887～1962)がいた。信一も詩作をしていたが、茂吉や不如丘との付き合いは、文学の領域にまで及ぶものではなかった。加藤はその理由を「おそらく当人の関心はその方面では道楽の域を出なかった」と推測する。信一と文学とは微妙な関係にあり、現在は文学に重きを置いていないことが示される。後に文学に開眼する加藤と信一とは、文学を巡って対立することとなる。

なお加藤は、東京帝国大学医学部在学時(1940～43)に、一度だけ茂吉に面会したことがあり、その時の印象を次のように述べている。

高名な歌人斎藤茂吉は、東北の訛の強い言葉を話す田舎の好々翁という感じの人で、飾らず温かい、親切な態度で、見ず知らずの青年を遇してくれた。「おお、加藤君の息子さんか」という風に、院長室での会話は始まった、と思う。大学以来ほとんど接したことのない、しかし名前は覚えている昔の同級生の息子、ということはほとんど全く係りのない青年を、多忙をきわめていたにちがいない時間を割いて引見し、しかもそこに一種の温かさが滲み出てくるようなし方で相手にすることのできるような人物で、茂吉はあった<sup>2</sup>。

「大学病院の内科教室では、医局長になった後に、主任教授が亡くなり、後任の教授の選び方について、医局員の意見と、大学当局の意見との間のくいちがいが生じた。医局員側の意見を代表していた医局長は、大学当局の意見が通って後任の教授が決定されたときに、大学を去って、開業した。」(26～27頁、改30頁、2段落)

信一が大学病院を去って、開業医とならざるを得なかった経緯。それは、東京帝国大学医学部で内科学講座を担当した青山胤通(1859～1917)の死去に伴う後任人事を巡る御家騒動がきっかけだった。青山の後任として大学当局は、青山の直弟子で九州帝国大学の増田龍吉(1874～1950)に白羽の矢を立てた。それに対して、信一率いる医局は、京都帝国大学の島藺順次郎(1877～1937)を推していた。結局、医局案は斥けられ、稲田が後任として呼ばれることとなった。以上の経緯から、恐らく稲田と信一との関係は良好ではなかったと推測され、信一は1922年に大学を辞職するに至る。妻の織子(1897～1949)は辞

<sup>2</sup> 加藤周一「斎藤茂吉の世界」鷲巢力編『加藤周一著作集17 日本の詩歌・日本の文体』平凡社、1996年、189～190頁。初出は1993年。

職に賛同し、開業の費用は信一の生家が負担した<sup>3</sup>。

ここには、「大学でながく仕事をつづけ」、いずれ学位をとるつもりだった信一の挫折が描かれている。また、「開業医の成功が」「しばしば、診断・治療のごまかし方や、人の扱い方の巧みさや、骨身を惜しまぬ労働によるだろう、とは想像もしていなかった」と書かれており、信一のパーソナリティでは、開業医が商売上失敗に終わらざるを得ないことが暗示される。

「渋谷の金王町にあったその家」(27頁、改31頁、3段落)

加藤は、1919年9月19日に東京府東京市本郷区本富士町一番地において生れる。まもなく東京府豊多摩郡渋谷町大字中渋谷(1928年に金王町と改称)に転居。【資料1】

「それは町医者が不幸にして成功しなかったというようなことではなく、そもそも若くして隠者の風を備えた男が、敢えて医業を心の赴くままに営んでいた、とでもいうべきことだろう。」(28頁、改31頁、3段落)

信一の開業した「内科医院」は、「看板はどこにもな」く、「訪ねてくる患者は、一日にひとりとか二人とかいう程度で、あたりはひっそりと、静まりかえっていた」。それに加えて、信一は、患者に対しても「無愛想」だった。その理由を加藤は「学者になりえたかもしれない地主の息子の気位が、「世間」とその風俗を無視して成りたった一種のぜい沢だったのではなかろうか」と述べる。ここには、前述した理由により、地方の有力者の息子として将来を嘱望され、大学で基礎医学の研究を続け、医学者となるはずだった信一の挫折の大きさと屈折が示されている。

また、加藤が「引退した役人」「隠者の風」「世間」とその風俗を無視」と評した、信一の実社会に対する極めて消極的な態度は、「土の香り」に登場する世捨て人同然の精一(1882～1950)と重なる部分もある(13～15頁、改14～17頁)。

「第一次大戦の終わった後、私はその家で生れ、その家で育った。」(28頁、改32頁、4段落)

加藤は、第一次世界大戦(1914～18)が終わった翌年に生れた。都市の上流中産階級の出身である加藤は、大戦後の大正デモクラシーのリベラルな雰囲気の中で成長した。そしてその後、ファシズムの時代と対峙することとなる。このような時代経験を、加藤や丸山眞男(1914～96)、日高六郎(1917～2018)らは共有している。

「そういう「往診」の患者のなかには、無愛想で「商売気のない」医者を用いる特殊な人々もあったらしい。」(29頁、改32～33頁、5段落)

①辰野家(辰野金吾・隆父子)

---

<sup>3</sup> 鷲巢力『加藤周一はいかにして「加藤周一」となったか——『羊の歌』を読みなおす』岩波書店、2018年、41～42頁。

②「ある財閥の名家」

安田善次郎が築いた安田財閥を指す。信一が往診していたのは、2代目当主の安田善三郎（1870～1930）・暉子（1875～1933）夫妻である<sup>4</sup>

「私はその「辰野さん」には面接の機会をもたなかったが、仏文の辰野教授には、後年知遇を得て」（29頁、改33頁、5段落）

加藤は、東京帝国大学医学部在学中に文学部の仏文研究室に出入りするようになり、建築家、辰野金吾の息子で、フランス文学者の辰野隆（1888～1964）と知り合う。また、辰野の「一九世紀文藝思潮」も聴講していた。辰野を加藤はべらんめえ調で話す「教室の外でも談論風発する快男児」と評している。『羊の歌』の他の箇所でも辰野は取り上げられ、同様の印象が次のように綴られている。

辰野先生は、巻舌でまくしたて、磊落豪放という感じで、冗談をいっては人を笑わせ、自分も笑っていたが、実は人の気持を見抜くことに鋭敏で、その心遣いは繊細を極めていた。すべてがあまりにもよくみえすぎたので、相手を息苦しくさせないために、好んで冗談をいっていたとしか、思われなかったほどである。たまたま私を見かけると、必ず「御尊父はお元気ですか」といわれた。先代以来の医者に、間接にでも、挨拶することを忘れなかったのである。（182頁、改206～207頁）

——というところで、辰野教授は、大声一番、「ぼくは大東亜戦争大賛成だ」という、「ただし……」。その「ただし」の後で少し休んで、「ただし前途有為の青年を殺すのではなく、年の順に上から兵隊にとるとすればだ。参謀本部の連中とか、鈴木君やぼくのように前途有為の方から、戦場に送ちまえというのならば、ぼくは大東亜戦争大賛成だね」。辰野先生は、いくさのはじめの頃、日本軍の大勝利をよろこんでいた。「真珠湾」は、「痛快な」活劇であった。「天皇陛下」は尊ぶべきであった。しかし権力をほしいままにした軍人と軍国主義に便乗した人々の心情は、充分に見抜いていて、突然、思いがけないことをいい出すことがあった。（183頁、改207～208頁）

加藤は、奇しくも文学に否定的な信一の人脈を介して、齋藤茂吉や辰野隆といった文学者に邂逅している。

「病を冒しても毎晩出かけなければならないほど「遊ぶのに忙しい」生活があり得る、ということに、私はおどろいた」（31頁、改35頁、7段落）

信一と幼い加藤が診察に通った「二代目の次男か三男か」は、安田善三郎・暉子夫妻の息子たちと思われる。伯父・精一に続いて、ここにも戦前の有産階級のデカダンスが描かれている。

<sup>4</sup> 作家・編集者の風間道太郎（1901～88）も信一の患者の一人である（同前、45頁）。

## 2、加藤家の子女教育

「金王町の家では、私のすぐあとにつづいて、妹が生まれた。」(31頁、改35頁、9段落)

妹の久子は、1920年10月に生れた。加藤にとって、久子はただ一人の兄妹であった。両親の「男女の子供を平等に扱」うという教育方針もあって、加藤は久子を深く愛した。

「仕事に忙しくなく、つき合いも少なかった夫婦は、二人の子供の教育に熱心であった。」(31頁、改35頁、9段落)

ここには、加藤家の教育方針が具体的に書かれている。前述したように父・信一は、開業医であるため常に在宅しており、その上患者も少なかったため、子女の教育に十分に時間を割くことができ、熱心にかかわったと思われる。

両親は、兄妹を平等に扱い、けんかの際も両者の言い分を十分に聞いて裁き、罪状に応じた厳しい罰を与えた。「子供は無条件に親の言いつけに従わねばならず、決して嘘をついてはならなかった」。加藤は、その厳しさを回顧しつつも、「親の不機嫌のために不当に罰せられたという記憶はない」、「両親以外の権威を引合いに出して、脅された記憶もない」として、その公正さを強調する。

また、「しかし罰を理由なくして加えず、必ず子供に納得の行くまで、その理由を説明していた」という両親の態度は、幼い加藤が感動した「小さな子供を相手に、何とかして納得しようと、どこまでも努力する」母方の祖父・増田熊六に通じる(9頁、改10頁)。このような両親の子女に接する態度からは、大正デモクラシーの影響を受けた、合理的かつ平等でリベラルな教育方針がうかがえる。

→「私は親に保護されて育ち、同じ年ごろの子供が知っているほどにも世間を知らず、悪意や策略に対しては無抵抗で、小さな不正に対しても敏感であった。」(33頁、改37頁)

「家庭は子供の私にとっては、全く自己完結的な閉鎖的な世界であり、そこには十分に納得することのできる善悪の法則があり、[……] 私は、合理的な、したがって理解することのできる小さな世界のなかに生きていた。理解することのできないものは、その世界の外にあったのである。」(32頁、改36頁、9段落)

家族4人の「自己完結的な閉鎖的な世界」は、両親の厳格な教育方針によって、合理的な基準を持つ「善悪の法則」に貫かれていた。その内部には、自明の価値基準が存在するため、全てが理解可能であり、予測可能である。しかし、その「小さな世界」の外部には、そのような価値基準が通用しない、理解不能な世界があることに加藤は気づき始めていた。

「叔父はみずからそれとは知らずに、私の世界の秩序そのものに挑戦していたのである。そういう挑戦は、子供の私に世間との接触がありさえすれば、いつでもどこでも、何度でもおこりえにちがいない。」(33頁、改37頁、10段落)

他の子供たちや叔父との接触は、「世間との接触」を意味する。それは、自己完結的な自己の内的世界とその外部に存在する世界との接触である。しかし、両親の深い愛情の下で純粋培養された加藤は、「世間」から切り離されていた。叔父の「不正」は、「私の世界の秩序」と「世間」との衝突であり、加藤はそれを外部からの「挑戦」と表現する。

「その意見のちがいをつきつめれば、都会で育ち、派手ではなかったが、交際を娛もうとしていた女と、大きな地主ではあっても質素な田舎の家の風習を身につけ、酒も煙草も飲まず、家に居て本を読むことを好んだ男との、相互の不満のあらわれであったといえるかもしれない。」(33頁、改37～38頁、11段落)

加藤をカトリック系の幼稚園に入園させるか否かを巡る両親の対立。入園を提案する母・織子に対して、無神論者で幼稚園の存在意義そのものに懐疑的な父・信一は反対する。

①加藤家において、両親の対立は日常的にあった

そもそも信一は織子の増田家に対して、織子は信一の加藤家に対して、あまり良い感情を持っていなかった。

「私の父は祖父を好まず、その「放蕩」を非難していた。妻以外の女との交渉は、悪事のなかの最悪のものであった。」(14頁、改8頁)

「「いやねえ、男のくせに、丈夫な身体で、なんにもしないなんて……」と私の母はいつていた。」(14頁、改15頁)

⇒『道化師の朝の歌』(河出書房、1948年)【資料2】

⇒加藤にとっての父と母【資料3】

②加藤の内なる父と母

加藤の教育方針を巡る両親の意見対立を描いたこの箇所は、父・信一と母・織子のパーソナリティの違いが、対照的に表現されている。「家庭史」を意味する前節と併せて読んでみたい。「祖父の家」は、増田熊六を軸に織子の背景にある、戦前の都市中産階級のハイカラ文化が描かれている。一方で、次の「土の香り」は、父の生家での加藤の思い出を主題とするが、信一の背景にある地方豪農層の質実剛健の気風が描かれている。つまり、前節は両親それぞれが、どのような環境で生育したかが示されており、本節において両者の相違が明瞭に描き出されることになる。

また、他の部分でも父と母とは絶えず対照的に描き出されている。それをまとめれば、父は、地方出身、武士・農民的、質実剛健・刻苦勉励、無神論者、非文学的を体現し、母は、都市出身、町人的、ハイカラ文化、カトリック信者、文学的を体現している。それは二項対立をなしている。このような両親の二項対立的な側面を加藤は内面化していると思われる。そして加藤の内部において、この二つの魂は、絶えず緊張と交錯を繰り返していたといえるのではないか。

「どうして他の子供に慣れたり、彼らの仲間に加ったりすることが必要なのだろうか」(34頁、改38～39頁、12段落)

加藤は1922年頃、幼稚園に入園するも他の子供たちと全く馴染もうとせず、やがて退園する。加藤は、子供たちの輪に入ろうとせず、「眺め」ていた。

「子供の私は、幼稚園の子供たちのために砂場や藤棚を設けた女学校の校庭の一角に立って、休み時間の校庭に制服を着た娘たちが右往左往し、その間を縫って頭から足の先まで黒装束の尼さんたちが辿るように歩いてゆくのを眺め、礼拝堂の鐘が青い空のなかで不思議な音をたてて鳴るのに耳を澄ましていた。」(34頁、改38頁)

「私自身は同じ年頃の他の子供たちが泣き叫ぶのを、珍しい動物でも見るように眺めていた。」(32頁、改36頁)

加藤は他の子供たち＝「世間」との隔たりを埋めようとせず、ただ眺めること、観察すること、「他処者」であること、に徹した(→「高みの見物」を示唆)。

また、この時点ではまだ「他の子供のなかにある世間の複雑さを私が発見する」ことはなかった(「幼稚園が私にのこしたのは、[……] 異様で強烈な感覚的印象だけであった」)。

「しかし、小学校へ行くまで、家族とだけ暮していた子供の世界が、全く合理的秩序にだけ従って働いていた、というのは正しくない。 ⇒「悪夢」

### 3、加藤の見た「悪夢」の意味

「ある巨大な車輪のようなものが——それが車輪であったかどうかははっきりしないが、音もなく、ゆっくりと、しかし確実に近づいてきて、私を押しつぶそうとする。押しつぶされるときに、私が消えてなくなり、私の世界の全体が永久になくなってしまおうということ、実にはっきりとわかっているが、どう逃れようとしても、逃れるみちはない。車輪のようなものは、途方もなく大きく、空を蔽い、灰色の空の全体が重い物体となってこちらに倒れかかってくるように、刻々と迫ってくる。」(35頁、改39頁、13段落)

→「悪夢」の内容①：巨大な車輪に押しつぶされる

「私自身がうず巻きと共に深く落ちてゆくこともあった。宇宙の全体が、うず巻きとなり、それが気体か液状のものかそれとも他の何ものであるかはわからず、とにかく廻転しながら限りなく深く吸いこまれてゆく。底に何があるかは私にわかっていない。おそらくそこには何もないのであり、無限に下降しながら、無限に私の世界——理解することの出来るこの世界から遠ざかってゆく。」(35頁、改40頁、13段落)

→「悪夢」の内容②：うず巻きに吸いこまれる

加藤は、「私の世界」「理解することの出来るこの世界」が、「車輪」「うず巻き」に象徴される外部の巨大な何ものかによって失われることに恐怖を感じる。「この二つの型の——といっておくことにしよう——悪夢のなかでの恐怖は、ながい間、現実の生活のなかでも、

また夢のなかでも、私を脅した唯一のおそろしいものであった」(36頁、改40頁)。

「いずれにしても、恐怖は、一切の破滅の予感と分ち難くむすびついていたようである。それは合理的な秩序、従って理解することのできる世界の破滅を意味していたのかもしれない。もしそうであったとすれば、合理的な秩序の下にかくされた暗い、不透明な、激しく、不合理な現実の深淵は、たとえ熱にうなされた時にかぎられていたにしても、私の幼年時代にすでに大きく開いていたといわなければならない。しかし現実のなかで私が深淵をのぞいたと思ったのは、はるか後になってからのことである。」(36頁、改40～41頁、14段落)

2つの「悪夢」の意味を説明。加藤は、恐怖の対象として「死」「家庭の外に無限に広がっていた人間の社会」「未知なるもの、一般に理解できぬもの」を挙げる。いずれにせよ、それは「合理的な秩序」「理解することのできる世界」の破滅と結び付いていた。

加藤の内部の合理的で秩序だった世界は、いずれ外部の不合理で無秩序な世界(不合理で複雑な「世間」、人間の社会とってよいかもしいない)と対峙せざるを得ないことが、「悪夢」の形をとって表現されている。しかしこの時点では、それが意識化されているわけではなく、あくまでも「悪夢」「予感」であり、予兆の段階である。なぜならば加藤はまだ幼く、両親の深い愛情と庇護によって、外部の世界や現実から「注意深く隔てられていた」からだ(「悪夢からさめると、母〔……〕の優しい声が、恐怖の世界から、午前の静かな陽ざしのなかで何事もなくそこにある日常の世界への、私の移行を援けてくれた」)。

「悪魔はしばしば私を襲ったけれども、しっかりと親の腕に抱かれた子供を、魔王は遂に奪い去らなかつた。」(37頁、改41頁、14段落)

ゲーテの詩「魔王」(1782)を意識した文章。驚嘆力は、巨大な車輪の「悪夢」と、母によってその夢から救われるという記述を、ユング派の「グレートマザー」を意識して書かれたものではないかとする。そして、それは加藤にとっての母の存在の重さ——加藤を深く愛すると共に支配する——が表現されていると指摘する<sup>5</sup>。

「私は、育った、病弱で、しつけよく、人の愛情に敏感で、奇妙な正義感にあふれ、他人とのつき合い方を全く知らず、自尊心が強くて、おそらく可愛気のない子供として。私は出発しようとしていた。」(37頁、14段落)

両親の愛情を一身に受けて育った加藤は、それ故に外部の世界に不合理なものが存在することを「予感」する。その後、加藤はこの外部に広がる世界とどのように対峙していくのか。

---

<sup>5</sup> 同前、66～71頁。